美しい横顔

なぜだか違和感があるほど鮮明で、その瞬間の空の色や匂い、その人の話す声色や横顔の睫毛の繊細さまで記憶しているようなことがある。それは意外と何気ない一瞬だったりする。ランダムに記憶されていく脳内のアルバムに何を追加するのかはもはや自分自身では選べなくて、数年後に何かがきっかけでそのアルバムが開かれ、それらが知らぬ間に自分の一部になっていたんだと気付く。

数年前、イタリアのそばにある小さな島に語学勉強の為数ヶ月滞在した時、同い年の韓国人の女性と出会った。彼女とはフラットメイトで同じ屋根の下で生活を共にした。料理が苦手で毎日シリアルばかり食べる私に、彼女は美味しい母国料理を作ってくれた。

彼女はとても綺麗で、優しくて、強かった。勉強する為にカフェに入り、近くの席のお客さんと政治について討論になった時も一歩も引かず、ひとしきり言い争ってお互い落ち着いた後、「甘いものが食べたい！」と言って、大きなチョコレートケーキを頬張っていた。私の語学力不足で、同じくフラットメイトであるコロンビア人と言い争いになり泣きながら部屋に戻った時も、「あなたは何も悪くない！」と言いながら仲裁に入ってくれた。

そんな彼女だから、周りにはいつもたくさんの人がいた。皆彼女が好きで、些細な相談をしたり、遊びに誘ったりしていた。私と彼女はお互い夜更かしで、いつも最後までリビングに残っていた。二

人きりになって話す時間が日に日に増えて、私は嬉しかった。

ある日の夜、彼女から、ビールを持って近くの砂浜まで行ってみようと誘われた。海に囲まれた島の夜は潮風が香ばしくて、どこからか聞こえてくるクラブ街の音楽と笑い声が心地よく、昼の照りつけるような太陽とは反対にいくつかの夏の星座が優しく瞬いていた。たどり着いた砂浜には私たち以外は誰もいなくて、小さな灯りが静かに呼吸する水面と停泊船を浮かび上がらせていた。

砂浜に刺したビールの空き瓶が増えるたびに、私たちはお互いに今まで誰にも話した事のないような話をした。言葉の壁が有るはずなのに、一つの単語からその何倍も想像して相手の言いたい事を汲み取りあいながら会話を続けた。彼女の感覚や価値観は、私の中に有るものととても似ている感じがしたのだ。

「あなたの人生は楽しそう。ジェットコースターみたいに色んなことがあって」と、彼女は言った。

「そんなことないよ。チャンスを掴めなかったし、結局今何もないから」

「何もなくなんかないよ！　たくさんの経験があるでしょ」

「あー…。うん。そうなのかなぁ」

「絶対にそうだよ！」

あまり吐き出すことのできなかった弱みが、素直に吐き出され潮風に溶けていった。彼女は彼女で、自分の人生は平凡で退屈でどうしようもないからとりあえず勉強していると言っていた。

全てが不思議で、全てがちょうど良かった。夜風の温度も、ビールの味も、ビーサンからこぼれ落ちる砂も。全く別々の人生を送ってきた二人が母国から20時間もかけてたどり着いた島の浜辺でこうして話していることも。近しい存在にこそ言えない胸の内が、彼女と私の間では話すことができた。

私は彼女にもっと自由に生きようと言って、彼女は私にもっと自信を持って生きようと言った。ほろ酔いで、少しだけ立派な大人にでもなったかのような気分の、ちっぽけな私たちの笑い声が響いていた。

小さな灯りのもとで眠りについている停泊船は、時間が来ればまた出港していく。彼女の横顔を見て、出会えた不思議さと近いうちに来る別れに鼻の奥がツンとしたのを鮮明に覚えている。

azufeeling